長良橋の渡り初めと伊奈波神社

伊奈波神社教学研究員　筧　真理子

岐阜市内を流れる長良川には長良橋・忠節橋など十一の橋が架けられ、毎日多くの人や車が利用しています。そのうち最も古いのは長良橋で、明治七年(一八七四)に初めて架けられたのを御存じの方も多いでしょう。

それ以前は、長良川を渡るのは渡船に頼っていました。しかしそれでは便利とはいえず、「我が随意なら長良の川に　橋をかけます舟橋を」と唄われていたという記録があります。明治七年六月に岐阜町の堀田九郎三は、天竜川・大井川などに架橋が許されて通行が大変便利になっていることから、長良と岐阜町の間を結ぶ橋の架設を岐阜県に願い出ました。その出願ののち、持ち株で渡船を運営する者たちとの間で一時は話がまとまりませんでしたが、最後には両岸の人たちが一緒になり、十一月一日に竣工しました。明治七年にできたことから「明七橋」と呼ばれたこの橋は、南半分は中洲を利用した木橋、北半分の川水のある場所は南北に引き渡した大縄に舟をつなぎ、その上に板を敷いて通行する舟橋で、橋のたもとの番屋で渡橋料を徴収しました。中央にはガラスの火屋を載せた灯柱が立ち、新時代のシンボルとして当時の錦絵にも描かれた自慢の橋でした(写真1)。

(写真1) 岐阜市歴史博物館所蔵「岐阜町鳥瞰図」の明七橋

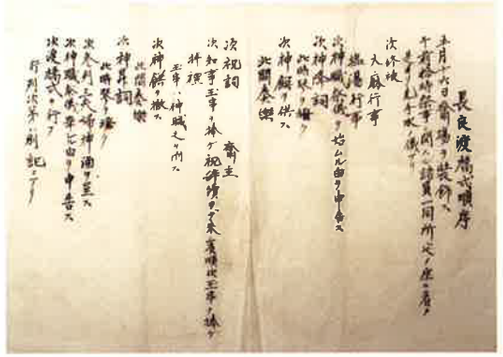
しかし早くも翌年五月には出水で橋梁が切れてしまいます。川の水量はそれほどでもなかったのですが、張り渡した綱が中ほどで一筋切れるとそこから総切れになったのです。舟橋である明七橋は増水に弱く、明治十七年に岐阜県により板橋に替えられました。これはすぐに民間に払い下げられ、やはり通行料を徴収する有料橋でした。この橋も次第に劣化し、洪水や鵜飼見物者が多いときには警察官を配置して通行を制限する状態となってきます。岐阜県は、利用が多く観光上の景観にも影響が大きい長良橋が通行料を徴収するのは不適切として、架け替え予算を計上しました。県議会で反対派との間に騒動がありましたが原案通り執行され、明治三十四年に初めて長良橋は無料で渡れるようになったのです。さらに大正四年(一九一五)には、二年近くの歳月をかけて鉄橋に架け替わりました。電車の軌道も橋上に敷設され、これによって川南の美濃電気軌道と川北の長良軽便鉄道が連絡できるようになりました。優美な形と豪華な橋灯を備えた橋は、市内名所として絵はがきの題材にもなっています(写真2)。現在の長良橋は昭和二十九年開通(このときは歩道のみ開放)で、明七橋から数えて五代目ということになります。

(写真2) 岐阜市歴史博物館所蔵

これら五代の長良橋のうち初代と四代目の渡り初めは次のとおりで、いずれも伊奈波神社が深く関わっていました。

初代の橋は明治七年十一月二日が「船橋開元初渡り」でした。この渡り初めには、まず伊奈波神社の馬島祠官と随従の神官五～六人を先頭に、伊奈波神社氏子の相生町・榊町が榊台に五色の絹を結んだ大榊をのせて吊り出し、岐阜町の男女児童およそ六百人が榊に結んだ白木綿を前後にひきながら渡りました。同じようにして長良からも渡橋行列があり、一行は橋の中央で出会って、そこに設けた祭典場で高木権宮司が祭典式をおこない、終わって長良の神木は中川原で、伊奈波の神木は長良神明宮でそれぞれ祈念がなされるという次第でした。半日がかりのこの祭儀が終わってのち、見物人も渡ることができました。川の両岸では見世物芝居やノゾキ見世物などが数多く興行され、前代未聞の群集であったと記録されています。

四代目は大正四年五月十六日が渡り初めでした。実は当初は工事請負者が木曽御嶽山を信仰する御嶽講社の神主に神事を依頼する予定だったのですが、岐阜市の総氏神である伊奈波神社としてはそれを認めることはできず、市・県に訴えて伊奈波神社が祭儀を執りおこなうこととなったという経緯がありました。このときの式次第「長良渡橋式順序」が伊奈波神社の古文書に残され(写真3)、新聞にも当日のようすがくわしく報道されています。それらによると、長良橋南詰めに斎場を設け、伊奈波神社の塩谷社司が祭壇や参列者を祓い清め(修祓)、神職による祭儀開始の宣告、神様をお招きする祝詞(降神詞)の奏上、神饌の供献、祭儀の意味を述べ神威を願う祝詞の奏上、知事・来賓らの玉串奉呈と祝辞を終えてから神饌を下げ、神様にお帰りいただく昇神詞と続きました。そののち「参列三夫婦神酒ヲ呈」し、神職が祭儀の終了を宣告してから渡橋式となりました。



(写真3)

「参列三夫婦」は、このとき渡り初めをおこなった、長良村村長の浅野家・岐阜市の大橋家それぞれ三世代の夫婦を指します。父世代の夫は袴、妻は黒紋付に頭からふわりと着物をかぶる「かつぎ」姿。子世代の夫はシルクハットに燕尾服、妻は黒紋付に綿帽子。孫世代の夫は山高帽に羽織袴、妻は色紋付と、世代ごとに違う服装をしているのも時代の流れを表現しており面白く感じます。

二組の三世代夫婦は神職・知事・来賓とともにまず下流側の歩道を岐阜市から長良村へ渡り始め、右岸橋詰で転回して上流側歩道を渡って岐阜市へ戻りました。午前十時に祭儀が始まって渡橋式が終わったのは午後一時で、それからようやく一般の通行が許されたのでした。待ちくたびれた人たちの中には、あくびの数を数えて統計をとっていた物好きもいたそうです。橋の両端正面には大アーチが立てられ、付近一帯には彩旗が連らねられました。陸上も川原も人が群集し、川面には百艘余りの遊船が見物する混雑でした。懸賞花火大会・餅投げ・相撲や岐阜駅前での競馬大会など余興も盛りだくさんで、お祭り騒ぎの一日でした。

三夫婦そろっての渡り初めはいつから始まったのかわかりませんが、文政六年(一八二三)には江戸の両国橋の橋開きで親・子・孫三世代の夫婦と幼い曽孫が橋を渡っている例があります。明治四十五年の忠節橋渡橋式にも三夫婦が橋を渡りました。現代でも、昨年五月に架け替えられた和歌山市の海草橋開通式の例があります。橋の開通にあたっての神事や三夫婦の渡り初めは、世代を超えて長く守られ受け継がれる橋でありますようにとの願いが込められているのでしょう。